

中林梧竹の使用印に関する基礎的研究

Fundamental research on NAKABAYASHI GOCHIKU's personal seal

* 勝目浩司
小原俊樹
(平成十九年十月一日受理)

はじめに

長期に亘り使用された印

渡清以前に用いた印

第一回渡清以後

第二回渡清以後

80歳代

おわりに

はじめに

中林梧竹については、いまさら人物についての解説は不要であろう。江戸末期から大正初めまで、八十七年の生涯を書に捧げた。篆・隸・楷・行・草の古典に精通し、各書体において名作を残している。様々な書籍に掲載され、また九州佐賀が生み出した書聖であることは、生前からいわれていたことでもある。

一方で梧竹は、江戸末期から明治期の日本書史の流れを具現化した作家ということも出来る。梧竹書の研究は近代日本書史を研究するためにも不可欠なものである。

本研究では、梧竹書の揮毫年齢判断の基礎研究として、使用印による

年齢判断を行い、同時に使用意図も考察するものとする。

『梧竹書芸集成』では、梧竹が使用した印は、およそ二百顆に上回るといわれている。その中から使用に関して特徴がみられる印について考察を行うこととする。印の使用や石印の欠けの進行状況により梧竹書の揮毫年代を推定する重要な材料となるであろう。

長期に亘り使用された印

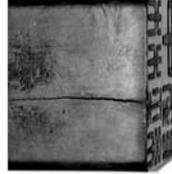
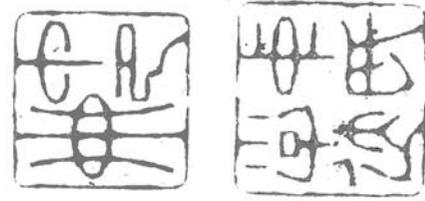
① 「梧竹深处」・「中林隆経」・「字子蓬」



本印はすべて木印である。宝地院が所蔵する扁額「通身手眼」(木額)にてこの印の組み合わせが使われている。額の裏には「明治八年乙亥九月吉旦」とあり、梧竹49歳の年にあたる。本印は晩年に至るまで好んで用いている。現在も中林家に残されている印である。この印は80歳代に至るまでは、特別な敬意を表す場合で用いたようである。また一説には梧竹自身が納得できた作に押したとされている。

尚、「中林隆経」の「経」右下部には大きな裂け目が生じている。

②「中林印」・「中氏子達」



本印も木印であるが両面印である。すでに49歳揮毫の板額「相知小学」に使用がみられる。



図版は恩師草場佩川の家に長く伝えられ、先年多久市に寄贈された「蒼字」より集録した。(図版下は印首に用いられている印である)「中林印」・「中氏子達」は60歳代から70歳代の間わずかに使用した例がみられるが、本文やいわれを検討してみると、この組み合わせも特別な敬意を表す場合のみ使用したようである。「先生」為書・神社仏閣蔵の作に押されていることが多い。尚、80歳以降は後述の「梧竹」(梧竹)印と組み合わせて使用されている。

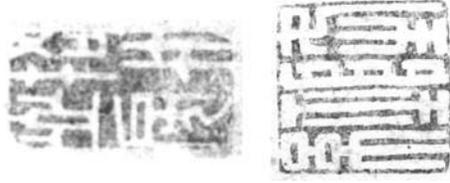
渡清以前に用いた印

- ① 「梧竹」・「小城人」・「隆経」・「梧竹書印」・「梧竹」



「いろは帖」にみられる印。明治6年(1873)47歳1月に『梧竹斎いろは手本』(現在中林梧竹記念館蔵)を作製する。半紙十六枚を縦に折り、冊子としたものである。その「いろは帖」に押されている印である。

- ② 「梧竹山房」・「隆経」



佐賀県小城市私蔵作の中より発見した印影である。「梧竹閑人」という落款と作風からみると50歳前後の使用と考えられる。

- ③ 「中林隆経章」



作品を美見した中では、50歳前後で使用された印と思われる。後出の印が引首印として押されている。

「梧竹」

「梧竹山房」



- ④ 「中林隆経」・「西肥人」



おそらく梧竹54歳頃から56歳、渡清直前まで使われた印である。後出の印が引首印として押されている。

⑥ 「羅漢後身」「隆経之印」「梧竹居士」

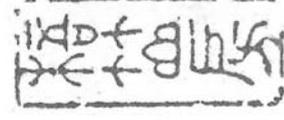


六朝風の揮毫作に押印されていることが多いことから、梧竹54歳頃から56歳、渡清直前まで使われた印と考えられる。

梧竹が第一回渡清を果たしたのは明治15年(1882)10月のことである。梧竹56歳。翌年北京にて印の制作依頼を行った後は、前出の印の

55歳揮毫の作二点に押印されていることを確認した。しかし実際の使用例はやや廻ってもよいと考える。

⑤ 「栖鸞閣」「日本中林隆経」「梧竹深处」



「梧竹山房」



「梧竹」

① 「梧竹山房」・「中林隆経印信」・「子達」



この印の組み合わせは「癸未夏」と揮毫された作品から取った印影である。「癸未」は明治16年(1883)梧竹57歳。渡清中の作ということになる。調査では渡清中・渡清後(58歳秋の作に押印)に亘って使用されているが、短期間の使用であったようである。尚、印風からみると、上海印人の手によるものかもしれない。

第一回渡清以後

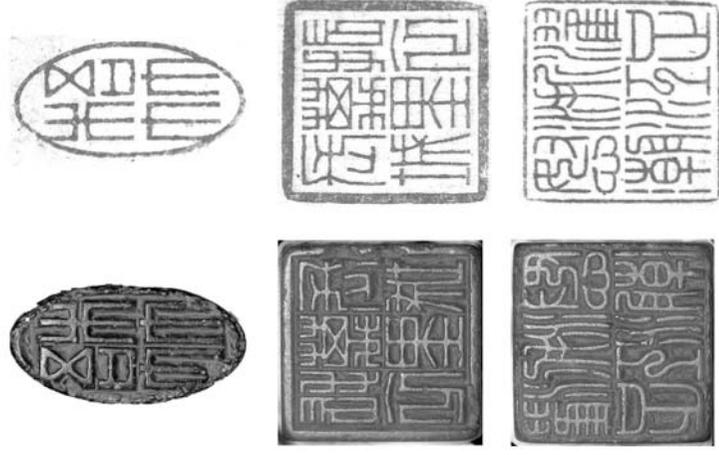
⑦ 「梧竹山房」・「隆経之印」・「子達」



使用例をみない。

次に挙げた印の組み合わせで押印された作を、佐賀で複数確認した。日野氏の印譜には掲載されていない珍印である。

② 「梧竹」・「振衣万里長城」・「濯足浙江怒潮」



梧竹が第一回渡清の際、北京にて作らせた印である。「振衣万里長城」印には四面すべてに、「濯足浙江怒潮」は三面に側款が刻されている。内容については、佐々木氏の論考に詳しく掲載されているので、ここでは省略する。刻者は濮韞莊。現在、中林家に保管されている。冒頭は制作後間もない頃の印影であり、ほとんど欠けがない状態である。左は現在の印面の写真である。第一回渡清以後、頻繁に用いられている組み合わせだが、後出する「後身名士前身仙」・「日本梧竹」・「再入燕山」の使用が始まる71歳以降は使用例が一時みられなくなる。しかし現在確認しているのは、73歳にての使用、北海道へ来訪した76歳頃からまた使用が始まり晩年まで使用した印である。本印は石材であり、その欠けの進行によって揮毫年代判断が可能となるものである。ここでは特に特徴的な欠けについて触れたい。

幸い梧竹68歳5月揮毫作品を二点調査した。その中で、「振衣万里長

城」印におもしろい現象を発見した。一方は右下の欠けがなく、一方は右下に欠けがある。この年の前後の作品を確認したところ、「振衣万里長城」印は梧竹68歳5月のいずれかの日に欠けたことが判明した。この欠けは現印を確認すると意図的に欠いたと思われる形跡がみつかった。印影でもわかるように自然に欠けたとは思えない欠け方をしている。



68歳



右下に意図的な欠け

62歳頃は「濯足浙江怒潮」外郭の欠け、「江」の「氵」縦画中央下部欠けがみられる。64歳作では「梧竹」外郭欠けの進行。66歳作では「梧竹」外郭欠けのさらなる進行とともに、「濯足浙江怒潮」「浙」終筆の欠けがみられる。68歳5月で前記の欠けと「振衣万里長城」左外郭に打ち傷がみられる。70歳では「濯足浙江怒潮」「氵」上部の欠けの進行、76歳では「振衣万里長城」左外郭に大きな欠けが二箇所、80歳代では外郭右下の欠けの拡大がみられる。この中には撃辺等人為的なものもみられる。

年齢	「梧竹」	「振衣万里長城」	「濯足浙江怒潮」	落款
57歳 頃				
58歳 秋	なし			
62歳 頃				
64歳 1月				
66歳 秋				
67歳 11月				

年齢	「梧竹」	「振衣万里長城」	「濯足浙江怒潮」	落款
68歳 5月 その 1				
68歳 5月 その 2				
70歳 正月				
76歳 10月				未撮影
77歳 5月				
85歳 頃				

④ 「不染」・「隆経」・「梧竹居士」

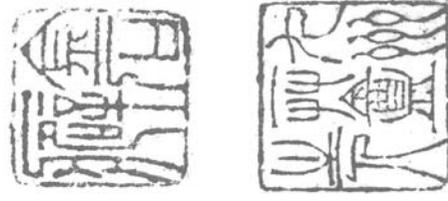


また、「金石癖」・「九州一草庵主人」を縦に並べて押印する場合も見受けられる。多くは60歳後半の臨書作である。

「九州一草庵主人」については、調査段階では、66歳揮毫の作に押印されていることを確認している。ただ本印については、第二回渡清以降の作に押印されたものを確認していない。

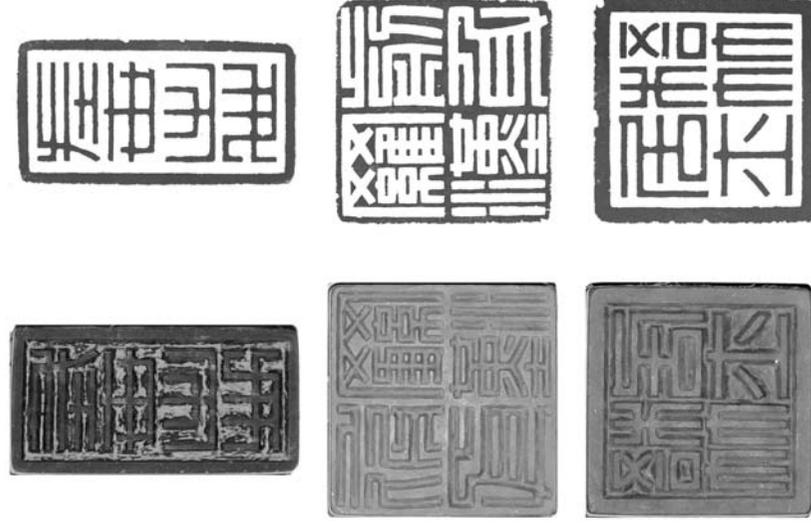
第一回渡清後から第二回渡清前まで、主に「梧竹」・「振衣万里长城」・「濯足浙江怒潮」の組み合わせの印と共に、作品右下に押された印である。「金石癖」は多くは古文の臨書作に押されている。また古文（六朝風を含む）を基調とした作品にも押されている。尚、「金石癖」は77歳での使用例がある。

③ 「金石癖」 「九州一草庵主人」



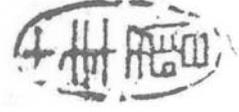
いずれも9センチ四方（「在世出世」の横幅は半分）ある巨印である。材質と大きさからもともと三顆組みの印で作らせたものと考えられる。本印も第一回渡清の際、北京で作らせた印である。

⑤ 「在世出世」・「前身羅漢」・「梧竹居士」



第一回渡清以後に本印の使用がみられる。「隆経」・「梧竹居士」については、58歳夏に揮毫された作に押印されている。②との使い分けはまだ調査中である。尚、「不染」印は新潟県の良寛が住んだ「五合庵」揮毫以後は良寛を敬い、使用しなかったとされている。尚、「五合庵」の揮毫年齢は佐々木氏の推測では明治28年（1895）梧竹69歳の時としている。ただ、実際には80歳代で使用された例があり、前記の説は覆される。

⑦ 「十年書」



本印は引首印として用いられているが、66歳作と68歳作に押印されているものを確認した。第一回渡清から「十年」という意味を込めたものとも考えられる。「振衣万里長城」・「濯足浙江怒潮」との組み合わせで使われている例が多いが後出の印との組み合わせもみられる。

本印は佐々木氏の説によると、71歳第二回渡清の際に作ったとされているが、後出の図版のようにすでに明治20年（丁亥）梧竹61歳の時、使用されている。

⑥ 「梧竹」



⑧ 「堡」・「梧竹」



第二回渡清以後

① 「後身名士前身仙」・「日本梧竹」・「再入燕山」



梧竹の第二回渡清は明治30年（1897）4月よりわずか二ヶ月であった。梧竹71歳。「日本梧竹」・「再入燕山」印は北京の石竹齋にて作らせた記録がある。

本印は制作されて間もない頃と思われる作品の印影をみると、全く欠けが見当たらない。現段階の調査では「日本梧竹」は73歳9月作にて「本」の右と下欠けがみられる。75歳2月作では、「梧」字の左と「竹」字左下に欠けがみられる。また「再入燕山」は75歳2月作では上部の欠けは見られないが、75歳12月作（図録での確認）では欠けがみられる。この欠けも自然なものとは思われない。76歳では「日本梧竹」の「日」右側上部に欠けがあり、86歳は欠けが二箇所が増えている。本印も晩年まで愛用した印である。



76 歳



71 歳



80 歳



73 歳



86 歳



75 歳

③ 「鳳凰栖処」・「曾経滄海」



77 歳

いずれも主に作品右下に押印された印である。「鳳凰栖処」は71歳渡清中の制作である。「曾経滄海」については初出を見いだせないでいるが、70歳後半からの使用が考えられる。いずれも80歳代まで使用している印である。資料として77歳作における「鳳凰栖処」を挙げておく。欠けの進行をみることが出来る。

② 「漢金石」



「丁酉歳六月廿二書於朝鮮海上玄海丸」と落款された作において、「漢金石」・「日本梧竹」・「再入燕山」の組み合わせで押印されている。「丁酉」は明治30年(1897)、梧竹71歳。第二回渡清帰路中の作である。尚、「漢金石」が引首印として用いられている作は、「日本梧竹」印に欠けがみられないことから、第二回渡清帰国後僅かな期間だけ「漢金石」・「日本梧竹」・「再入燕山」の組み合わせを用いたことが考えられる。

⑤ 変形印



76歳揮毫の竹図に押印されている。日野氏は「中」の間に「林」があるとされている。



いずれも 77 歳

80 歳

本印も第二回渡清中に制作されたものである。小城市中林梧竹記念館の蔵品の中で、朱竹の図があり、梧竹の庇護者小寺芳次郎宛の文が金泥で揮毫された作がある。本作では「雲中羅漢」・「神通自在」・「梧竹」の印に金泥を塗って押印しており、おそらくこの印影が初出ではないかと考えられる。これらの印は石印であり、欠けの進行がみられるものである。次に参考資料を挙げておく。



④ 「雲中羅漢」・「神通自在」・「梧竹」

⑧ 「本無迷悟人」・「銀街市隱」・「閑身起臥大都中」



本印も初出は未だ調査中であるが、前出の印との関係を考えて、管見では、喜寿以降に使われた可能性が高いと考えている。東京揮毫の作に押印されたものと考えられる。

まだ確証は得られていないが、70歳後半で使用された引首印である。図版は77歳揮毫作による。

⑦ 「我心素已閑清川淡如此」



現在確認している初出は76歳揮毫作である。「五雲山人」は83歳以降の使用が目立っている。掲載の図版は83歳揮毫作から取ったものである。

⑥ 「謙受益」・「五雲山人」



⑪「七十九叟」



真贋は不明であるが、一点の作品で確認したので掲載した。

⑩「小城」「入唐梧竹」



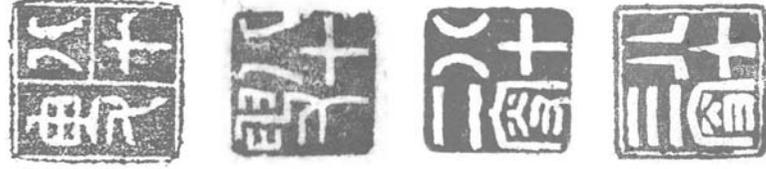
77歳臺寿の祝いとして香取秀真が作成したものである。尚、市場にはこの印の組み合わせを用いた偽作を多くみかける。

⑨「七十七叟」



文字通り77歳揮毫作に押印。引首印に菱形富士が使われている。これは富士山で拾った自然石であるとされている。

①紀年印「八十叟」・「八十叟」・「八十二叟」・「八十三叟」



80歳代には紀年印が四種存在する。それぞれに干支の印と共に使用されているが、「八十三叟」だけは後出の組み合わせで使用されている。「丙午」は「八十叟」との組み合わせ、「戊申」は「八十二叟」との組み合わせで用いられている。

80歳代

70歳後半からの使用がみられる印である。単独で使用する他に、前出の「七十九叟」、後出の「八十叟」と組み合わせて押印されている。尚、現在も中林家に伝わる印である。尚、前出の「後身名士前身仏」・「曾經瀆海」・「神通自在」・「本無迷悟人」も現在中林家に残されている。

⑫「中林梧竹」



② 「丙午」・「戊申」

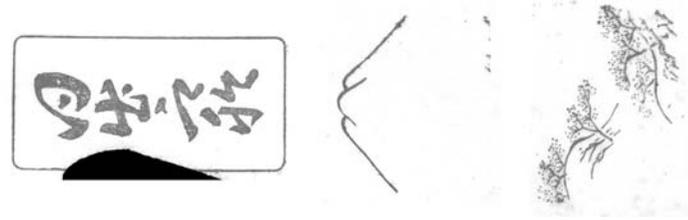


③ 「心寛坐草廬広眼放観天地窄」・「八十三叟」・「金田野人」



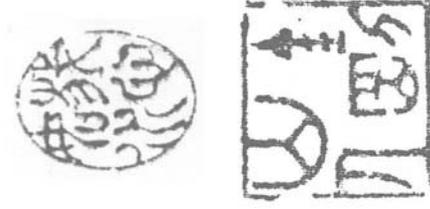
本印中「金田野人」が中林家に残されている。尚、「金田」とは観音堂がある地名である。

④ 「日出之邦」 「富士図形印」 「吉野桜図形印」



84歳での使用が認められるが、85歳落款の作にも押印されている。いずれも中林家に伝わるが、印面の写真は見つらいため省略する。

⑤ 「我心如水」・「金剛山人」



本印は85歳頃の揮毫作から印影を採用したが、「我心如水」は58歳夏の揮毫作に押印されている。これが事実ならば、梧竹は印を大切にした人物ということが出来る。

⑥ 「魚水樵山畔雲読雪朝花酌酒吟風弄月」



87歳で使用された印である。明の文寿承の印である。日野氏の印譜では「読書」と解釈されているが、正しくは「読雪」である。尚、『中林梧竹の書』では訂正されている。

おわりに

本研究では、実見し撮影出来た印影を用いたため、写りが悪いもの、判然としないもの、歪みがあるものが含まれている。また、よい写真が撮れなかったため、割愛した印も多くある(本稿掲載の印影は、編集の

都合上、原寸大ではない)。なお、今回取り上げた組み合わせ以外にも様々な組み合わせで押印されていることを付け加えておく。今回取り上げなかった印で、制作年代が明確になっているものは、先賢の著書でご確認頂ければ幸いである。ただ本論で取り上げなかった印をここに付記しておく。

・「八十八翁」

八十八翁



実際には作品に押印されることはなかったが、中林家に伝わる木印である。この印を取り上げたのは次に挙げた書との関係を感じるからである。書は残念ながら「八」と「十」が剥離してみえづら

くなっているが、明らかに「八十八 梧竹」と揮毫され、下部に「日本 梧竹」・「再入燕山」の印が横向きに押印されている。実際には梧竹は87歳の8月4日に死去したが、この印と書をみるにつけ、梧竹の生への執着を強く感じる次第である。

今回は梧竹の使用印について整理と考察を行ったが、作業を進めるにつれ、梧竹の「印癖」とも呼べる使用印へのこだわりを強く感じた。その意味では、富岡鉄齋を連想させる。ただ、鉄齋は梧竹より十歳年下である。また、長崎の印人小曾根乾堂との関わりも見出しつつあるが、こ

の点については稿を改めて考察したいと考えている。

さらに、現在残されている印に撃辺の跡らしき所や、刀を当てた跡がみられることも注目すべき点である。本論で述べた撃辺の後がみられる時期が、丁度呉昌碩が頭角を現し始めた時期と一致することも興味深い。もともと梧竹が清国で作らせた印は、北京印人によるもので、その当時、北京印人には撃辺の習慣はなかった。この点についても考察を深めていきたいと考えている。

本研究では中林梧竹記念館、中村秀利氏の全面的協力を頂いた。また日野俊顕先生からは多くの助言を仰いだ。紙面を借りてお礼申し上げます。

主な参考文献

- 『蒼海・梧竹の書』 佐賀県立博物館 1972
- 『中林梧竹』 佐賀県立美術館 1977
- 『蒼海・梧竹』 佐賀県立美術館 1985
- 『中林梧竹』 佐々木盛行 西日本文化協会 1991
- 『墨美』 294 印譜編 1979
- 『梧竹書畫集成』 日野俊顕 講談社 1979
- 『中林梧竹書』 日野俊顕 二玄社 2006
- 『中林梧竹の書』 日野俊顕 天来書院 2007
- 『墨スペシャル』 19号 中林梧竹特集 芸術新聞社
- 『いろは帖』 中林梧竹記念館蔵